

手をつなごう自治研活動

全国で自治研活動や「自治研的活動」に取り組んでいる若い世代の活動を紹介します。

手をつなごう自治研活動「大和高田市既存施設の活用研究」を通して学んだこと——「若い力」の必要性

奈良県高取町職員労働組合／自治研推進委員
西川侑里

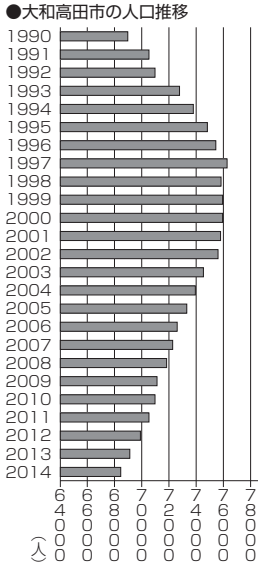


にしかわ ゆり ●奈良県高田市郡高取町出身。二〇二三年四月より高取町役場に就職し、同時期に職員労働組合に加入、就職二年目で組合執行委員に選出され、高取町の自治研推進委員として自治研奈良県本部の自治研活動に参加することとなった。大学時代から、地域の祭りやボランティアスタッフとして参加・協力するなど、地域での活動に関心を持っていた。

若い世代と考える地域活性化を

「奈良県内の地域活性化のためにはどうしていくべきかを、若い世代の方々とともに考えよう。」これが、このたび私が参加

した自治研奈良県本部における自治研活動の主軸となるテーマであった。このテーマのもと、私たち奈良県本部自治研推進委員二七人は三グループに編成され、公募した「短期地域おこし研究員」(おおむね三〇歳までのいわゆる「若者」と呼ばれる人)を各グループに数名迎え入れて、奈良県内の地域活性化について考えることとなった。私たちのグループには、奈良県立大学の学生一人が「短期地域おこし研究員」として参加してくれた。私たちは奈良県内にある大和高田市に焦点をあてて、二〇一五年四月〜六月までの短期ではあるが会議や視察を重ねて、その地の地域活性化について意見を出し合い、そ



これらの取り組みの結果を「大和高田市既存施設の活用研究」と題して、最終的にひとつのレポートに集約した。以下に、その内容を紹介する。

●大和高田市の現状

大和高田市は、奈良県中西部に位置している。市の人口は約六万七六〇〇人(二〇一五年七月一日現在)、面積は二六・四八平方kmあり、県内で最も人口密度が高い中核都市であるが、近年は人口が減少傾向にあり、高齢化も進んでいる。

江戸時代には諸藩領や天領が錯綜しており、中期以降は綿作が盛んになると本郷地域を中心に市場町として発展し、近代には紡績工場が設置されたことで繊維産業の中心地となった。一九六〇年代以降、この紡績工場が閉鎖され、最近では中国製食品

との競合もあり、地場産業である繊維産業は外国製品に押され、かつての勢いはみられない。また、大和高田市内中心街には商店街が数カ所存在する。かつては商店街を中心として映画館や商業施設が立ち並び、人びとが行き交っていた。しかし、全国的狀況と同じく、近年の都市環境の急激な変化にともない、中心市街地の空洞化が進んでいる。買い物客は大都市である大阪や近隣の大型ショッピングセンターへ流出し、大和高田市の商店街はかつての賑わいを失いつつある。

●既存施設を活用した地域おこし

これらの現状をふまえ、私たちは市にある既存の施設を活用する方法を軸に大和高田市の地域おこしについて考えた。

(1) 既存の商店街の活性化

ここでは「子ども子育て」がキーワードとなった。商店街は、徒歩や自転車でのアクセスを基本としているため付近に駐車場が少ない。車社会の現代において、これは、駐車場を整備した大型ショッピングモールへ顧客が流れる一因となっていると考えられるが、その問題を逆手にとれば、「車が少ない子どもにとって安全な場所」とも言える。さらに、商店街の空き店舗に、駄菓子屋や文具屋、地域住民が昔の遊びを教えることができるコミュニティスペースなどを展開して、子どもたちにとって魅力のある楽しい場所にし、地域住民が商店街の中で子ども



市内にある商店街の様子

を見守る仕組みづくりを整える。こうすることによって、小学生くらいの子どもを持つ親たち（三〇代〜四〇代）にとっても、安心して子どもを遊ばせることができる場として商店街の認識が広がることを期待し、多世代が交流するコミュニティの場として商店街を活用する方法を提案した。

(2) 繊維などの地場産業の活用

大和高田市の地場産業を支えてきた工場は、従来のように収入売上のみに力を入れるだけでなく、今流行りの工場見学や工場の歴史を伝える教育の場として工場を活用する。子どもや若者が興味を持ってくれるような、新しい工場の魅せ方を提案した。

(3) 古民家の活用と集客

大和高田市には明治から昭和にかけて、多くの映画館と劇場があり、近隣のみならず遠方からも人びとが訪れ、賑わいがあつたと言われている。時代は流れ、テレビの普及や娯楽の多様化により映画館はすべて閉館となつてしまつたが、映画館に集つた人びとの記憶は今も忘れがたい大切なものはずである。さらに近年、全国的にも映画館以外の映画上映会が、地域おこしの一環として企画され行われていると聞く。これをヒントに、大和高田市にある文化建築や古民家を映画館として再利用し、かつて人びとが映画館に集つたように、「古民家と映画」をテーマにコミュニティを創造する方法を提案した。

私たちは、以上のような既存施設の活用方法を考案し、レポートの最後は、「全く新しいものを作る必要はなく、今あるものを活かしていく、そういつた地域おこしをめざしていきたい」と結んでいる。

● 「若い力」の必要性

レポートのなかには、現地の方の声として、大和高田市内の商店街で老舗店を経営している二人の男性の意見も紹介されている。お二人の意見に共通しているのは、「地域活性化に必要なのは若い力と勢いだ。市が主体となつてこれからの大和高田市のそれは少し違う意味を持つと私は考える。自治研活動を通して私が感じた地域住民が求める「若い力」とは、もつとシンプルで、人という個体の存在そのものではないかと思う。

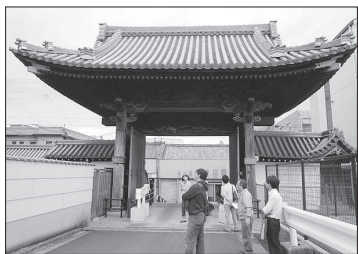
を担う人材を育成することが大切だ」ということであつた。また、このたびの自治研活動のテーマも、地域活性化について「若い世代」と考えることである。そして、私たちが考えた大和高田市の既存施設の活用方法も、PRする対象のほとんどが「若者」をターゲットとしており、まさに若者が集まるように考えられている。一体なぜ地域は「若い力」を求めるのだろうか。この度の自治研活動を通してたびたび感じたこの疑問について、私なりに考えを巡らせた。

「若い力」の必要性を、行政機関と地域住民のふたつの立場から考察する。少子高齢化が叫ばれて久しいなか、都市部への若者の流出による地方の税収の減少や加速する高齢化による医療費の増大は、どの自治体も大なり小なり直面している問題と言える。支えられる者の数に対して支える者が減ることにより自治体の財政は圧迫され、結果、行政機関として今後新しくできることが限られてくるだけでなく、従来の公共サービスさえも削減せざるを得なくなることも考えられる。そして、それがまた人口流出に拍車をかけるといった悪循環にも陥りかねない。自治体において、若者の獲得による財源の確保は急務と言つて過言でないのだ。

● 地域住民が求める「若い力」

一方、地域住民にとつての「若い力」とは、行政機関にとつ

てのそれは一部あるとは思うが、それよりも「自分たちにとつて大切な場所をなくしたくない」願わくば、いつまでもいきいきとした場所であつてほしい」という想いが、自治研活動を通して私には強く感じられた。この想いを若い世代に上手く引き継ぐことが、今後の地域活性化において大切になってくると私は考える。また、人という個体には



大和高田市の専立寺を視察

無条件に「エネルギー」が備わっている。ここでいう「エネルギー」とは、活力といった意味はもちろんのこと、可能性や未来とも言い換えることができるだろう。そしてそのエネルギーは、若ければ若いほど大きなものであると思う。つまり若者は、世代をつなぐ存在としてその活力や可能性を期待され、必要とされているのである。

●——官民一体となって地域を愛する若者を育てる

先にも述べたように、地域に対する愛情を若い世代に上手く引き継ぐことが、今後の地域活性化において重要な意味を持つと私は考える。そのためには、子どもや若者に愛されるまちづくりや、地域を愛してくれる人材育成をめざす必要があるだろう。「大和高田市既存施設の活用研究」のレポートでも提案した

ように、知恵をしばれば既存の施設も若者にとって魅力的なものに変わる可能性は十分にある。地域住民が協力して、若者や子どもにとって魅力のあるまちづくりを進めることは、地域活性化に多大な成果をもたらすことになるだろう。

また、行政機関には、リーダー講座の開催やあるいは幼少期における郷土教育への注力など、豊かな経験を持つ大人たちが若者や子どもを導く機会を積極的に設けることを期待したい。若者が地域を好きになるためにはまず地域を知ることが必要であるからだ。このように官民一体となって、地域を愛してくれる若者を獲得することこそ、将来の地域力を左右するカギとなるだろう。以上が、この度の自治研活動を通して私が学んだことである。